

寛正二年在銘の「怪士」面が物語ること

宮本圭造

能の成立は今からおよそ六百五十年前の十四世紀中葉にまで遡るが、当時の能の演目ではすでに、鬼神などを象った仮面が用いられていたらしい。例えば、『太平記』が伝える貞和五年（一三四九）の京都四条河原での勸進田楽。新座・本座という田楽二座が老若二手に分かれて立合で芸を披露する大規模な催しであったが、そこでは「日吉山王の示現利生新タナル猿楽」という能が演じられ、少年の役者が日吉山王神の表象である「猿ノ面」をつけ、飛び跳ねながら登場したという。また、同じ年に奈良で行われた春日若宮臨時祭でも、春日社の禰宜が担当した田楽の芸能の中で「村上天皇の臣下貞敏が入唐して琵琶の三曲を日本に伝えたこと」をテーマとする能が演じられ、龍王と龍神の役を務めた三人の登場人物が、「ヲモテヲキ」で舞台上に登場したと記録されている（『貞和五年春日社臨時祭次第』）。もっとも、能成立期の能面がどのようなものであったのかは、まったく不明とせざるを得ない。年代を確定しうる当時の能面の具体的な作例が、何一つ残されていないからである。

下って観阿弥・世阿弥の時代、すなわち十四世紀末から十五世紀初頭は、一般に能の

大成期とされる。世阿弥の晩年期の談話を書き留めた『申楽談儀』によると、この時代には、

赤鶴・石王兵衛・龍右衛門・小牛・徳若らの面打が活躍したという。実際、彼らの作と伝わる能面が、現在、各所に少なからず残されているが、その多くは（伝）赤鶴作・（伝）徳

若作というように、作者に関してはまだ後世の伝承の域を出ない。つまり、十四世紀末から十五世紀初頭まで下っても、確実に当時の作と認定しうる能面の作例は、ほとんど見当たらないのが現状なのである。今後、年

輪年代測定法などに基づく調査が進めば、新たな能面史が構築されることも期待されるが、現時点で最も頼りになるのは、やはり刻銘や墨書銘といった形で能面の裏に記された「年記」ということになる。そして、その銘記

によって確実に世阿弥時代に遡る古面として誰もが認めうる作例は、これまでのところ僅かに二面しか存在していない。すなわち、その一つは、応永二十年（一四一三）、「千草左

衛門大夫作」と刻銘のある奈良市・奈良豆比古神社が所蔵する瘧見面、もう一つは、世阿弥の息子・観世十郎元雅が寄進した奈良県天

川村・天神社蔵の有名な尉面で、前者は『申楽談儀』にも言及のある面打「ちぐさ（千草）」

の作、後者は墨書銘によって世阿弥晩年期の永享二年（一四三〇）以前の作と知られるものである。その他、岐阜県関市・春日神社の永和二年（一三七六）銘の小面、奈良県宇陀市・正福寺の「秘相也／十二祐康／永享年中」と墨

書銘がある阿波男（霊の男）面の存在も知られるが、ともにその銘記は後世の所為の可能性が高く、そこに記された年記をそのまま鵜呑みにするわけにはいかない。もっとも、正福寺蔵阿波男の墨書銘に名前見える「十二祐康」は、世阿弥時代に活躍した十二五郎康次の諱と一字を共有し、十二康次の次代で、後に観世座の長となった十二次郎と同一人物の可能性がある。また、観世宗家にもこれと酷似する阿波男面が「文蔵作」の伝えとともに伝来しており、永享年中の作と見ても大きな矛盾はないのだが、現段階では、世阿弥時代の年記を紛れもなく有する古面としては、やはり先の二面において他にないと見て間違いない。そしてこの二面は、現在の洗練された能面の様式と比較すると、いかにも素朴で野卑な面という印象が強いのである。すなわち、世阿弥時代の能面と現在の能面との間には、能面の美的洗練さにおいて、なお大きな懸隔があると言わざるを得ない。そして右の二面はさらに次のような新たな問題を提起する。世阿弥時代以後の能面が、現在の能面のような繊細な美的表現を獲得するのは、いつ頃からののか、能面の洗練された様式は、いつ、どのようにして形成されたのか、という問題である。

しかしながら、右の二面に続く年記を有する能面が、残念ながらほとんど残されていない

の作、後者は墨書銘によって世阿弥晩年期の永享二年（一四三〇）以前の作と知られるものである。その他、岐阜県関市・春日神社の永和二年（一三七六）銘の小面、奈良県宇陀市・正福寺の「秘相也／十二祐康／永享年中」と墨書銘がある阿波男（霊の男）面の存在も知られるが、ともにその銘記は後世の所為の可能性が高く、そこに記された年記をそのまま鵜呑みにするわけにはいかない。もっとも、正福寺蔵阿波男の墨書銘に名前見える「十二祐康」は、世阿弥時代に活躍した十二五郎康次の諱と一字を共有し、十二康次の次代で、後に観世座の長となった十二次郎と同一人物の可能性がある。また、観世宗家にもこれと酷似する阿波男面が「文蔵作」の伝えとともに伝来しており、永享年中の作と見ても大きな矛盾はないのだが、現段階では、世阿弥時代の年記を紛れもなく有する古面としては、やはり先の二面において他にないと見て間違いない。そしてこの二面は、現在の洗練された能面の様式と比較すると、いかにも素朴で野卑な面という印象が強いのである。すなわち、世阿弥時代の能面と現在の能面との間には、能面の美的洗練さにおいて、なお大きな懸隔があると言わざるを得ない。そして右の二面はさらに次のような新たな問題を提起する。世阿弥時代以後の能面が、現在の能面のような繊細な美的表現を獲得するのは、いつ頃からののか、能面の洗練された様式は、いつ、どのようにして形成されたのか、という問題である。

しかしながら、右の二面に続く年記を有する能面が、残念ながらほとんど残されていない

ない。具体的な作例としては、応仁の乱後の文明年間(一四六九〜八七)になるまで現われず、応仁三年(一四六九。文明元年)銘の若い女(栃木・日光山輪王寺蔵)、文明二年銘の若い女(岐阜・長滝白山神社蔵)、文明七年銘の小飛出(同社蔵)、文明十三年銘の阿古父尉(梅若実家蔵)などが、現在知られている数少ない作例となる。さらに時代を下つても、明応二年(一四九三)、「ヒカキモト七郎作」の若い女・若い男(勝手神社蔵)などが、かろうじて十五世紀末までの作例として挙げられるに過ぎない。しかも、右のうち最初の三例は、地方の寺社伝来の稚拙な作風の面で、これを能面史の示準とするのは困難と言わざるを得ず、よつて僅かに、文明十三年(一四八二)の阿古父尉、明応二年銘の若い女・若い男だけが、十五世紀後半に制作された能面の水準を示す数少ない作例として位置付けうる、ということになる。その他、根津美術館に長享二年(一四八八)の朱漆銘がある頼政面の存在が知られているが、これも後世に書かれたものらしく、当時の作とは認めがたい。以上を要するに、永享年間から文明年間にいたる約四十年間は、能面の歴史において全くの空白期となっているのである。

しかるに最近、その空白期を埋める一つの能面に遭遇した。しかも、それが日本ではなく、ドイツ・ハンブルクのローテンバウム博物館(Museum am Rothenbaum)という場所であったのは、少々意外なことであった。同館はかつてハンブルク民族博物館(Museum für Völkerkunde Hamburg)と呼ばれていたが、近年の博物館組織の改編と移転によって右記

の通り改称されたものである。同館にまとまった数の能面が所蔵されていることは、すでに西野春雄氏「海を渡った能楽面」(『能楽研究』二十一号所収。一九九八年五月)が報告する通りで、現在は二十五面の能狂言面の所蔵が確認される。そのうち19.73.1の所蔵番号が与えられた能面は、一九一九年八月、他の神楽面一面とともにユリア・クリーガー女史から同館に寄贈されたもので(それ以前の伝来については不明)、現在の能面にこれと全く同じ型の面は見当たらないが、一応、怪士に分類される面である(写真1)。法量は縦二〇・五センチ×横一四・六センチ×厚さ九・七センチメートル。



(写真1)

その面裏の額部分に数行にわたつて墨書銘が記されていることが、赤外線カメラを用いた今回の調査によって新たに明らかになった(写真2)。一部、後代の貼紙の下に隠れて墨書が読めない箇所もあるが、「奇進」(寛正二年/□月□日)と読める。その傍らに、



(写真2)

「花押の刻銘があり、上端にはさらに二字程の横書き墨書銘があることが確認されるが、残念ながら上端部の墨書銘に関しては赤外線画像によつても判読には至らなかった。ともあれ、右の墨書銘は、この面が寛正二年(一四六二)に寄進されたものであることを物語っている。その古風な書体は特に後代の加筆を思わせるところがなく、また面裏の彫りも、目の部分を楕円状に広く削る点や、鉋目を無造作に残す点などが、江戸期の能面とは異なる古様を見せており、墨書銘の示す年代と、面の作風から窺われる制作年代との間に大きな矛盾はない。墨書銘の伝える通り、こ

の怪士面は寛正二年に寄進された面と見てま
ず間違いないと言つてよからう。

額には鉢巻留めの突起があり、やや黄土が
かった彩色もよく残るが、これらは寛正年間
まで遡るとは到底考えられず、表面は後代の
塗り替えである可能性が想定される。現状の
彩色がなされたのはおそらく江戸期まで下る
であろう。面裏には先の墨書銘とは別に、「早
男」の朱書きが見える。これも江戸期に書き
加えられたものと思しい。「早男」は瘦男系の
面であるが、この面の名称としてはあまり相
応しくない。怪士面にしてはやや異風である
ことから、後代の人物が名称を誤つて書き記
したものと推測される。西野氏はこの面を「白
怪士」と仮称し、「天神の神性性と怪士の不気
味さを併せもつた表現」と評している。眉間
に皺を寄せているところなど、確かに天神の
面を思わせるところが随所にあり、通常の怪
士面では表わさない耳を伴っている点も注目
される。

以上の如く、右の怪士面は現在の能面の規
格からすると若干外れるところもあるのだが、
にもかかわらず、この面はすでに能面として
の洗練された彫刻表現を過不足なく体現して
いる。現代の舞台でも十分に使用に堪えうる
能面の様式美を、この怪士面は確かに備えて
いるのである。怪士面が寄進された寛正二年
には、まだ観世音阿弥も金春禅竹も現役の能
役者としてバリバリ活躍していた。ハンブル
クの怪士面は、そのポスト世阿弥時代におけ
る能面の成熟を如実に物語る、非常に貴重な
作例と位置付けられるのである。

(法政大学教授)